

東京芸術大学美術学部1983年

## 敦煌学術調査 国際化の進展

佐藤道信

日本近代美術史。主要著書『日本美術 誕生 近代日本の「ことば」と戦略』『明治国家と近代美術 美の政治学』がある。

一九八三年九月、砂漠の中に千年にわたって造営された敦煌石窟に、本学の第一次学術調査団が到着した。シルクロードから遠く日本の法隆寺にまでいたる壮大なスケールの東西文化交流の調査が始まった。調査団は、平山郁夫を団長に、日本画（福井爽人、下田義寛）、建築（茂木計一郎）、美術史（水野敬三郎、田口榮一ほか）からなる、美術学部の合同チーム。前年の予備調査から八七年の第三次調査まで、日本の仏教美術の源流ともいうべき敦煌の、密度の高い学術調査が行われた。

当時、敦煌は急速に変わりつつあった。中国の開放政策を背景に、観光客がふえ、宿泊施設が整い、空港も新たににつくられた。第一次調査団は、砂ほこりのなかを延々とバスにのって敦煌にいたらしいが、八五年の第二次調査団は、できたばかりの敦煌空港に空路で行っている。敦煌研究所も、研究「院」と名前を変えて拡充しつつあった。

こうした状況のなかで、ちょうど日中国交回復十周年の時期に始まったこの調査は、中国側の全面協力をえて進められた。調査団が北京にいた時には、毎回要人が歓迎してくれるVIP待遇だったらしい。まさに日中友好の文化交流事業だったことがわかる。中国側の敦煌の遺跡保存にかける熱意と姿勢は、強く厳しいものだった。ここでの調査と研究交流が、のちに本学に文化財保存学の講座が新設される、重要な伏線となる。またいまでも、敦煌文物研究院から研究者が毎年来学しており、交流が続いている。

合同チームによるこうした学術調査の海外派遣は、この時が初めてではなかった。それ以前にも二回あった。最初は、発見されてまもないトルコ・カッパドキアの岩窟修道院を中心とする、中世オリエント遺跡学術調査団（六六年、六八年、七〇年）。二回目は、イタリア・アッシジの聖フランチェスコ修道院などを中心とする、イタリア初期ルネサンス壁画学術調査団（七三年、七六年）。これらの二回の調査も、それぞれ大きな成果をあげたらしい。ただ敦煌の調査が、前二回の調査と大きく違って



敦煌石窟入口の門（1982年）



石窟上より南側石窟群を望む（1983年）



敦煌（1982年）  
（3点とも撮影提供=田口榮一）

いたのは、同じ学術調査でも、それが国あるいは政府レベルに近い文化事業として行われたことだった。これは本学の活動の国際化と、その後の進展からみても、大きな画期となる出来事だった。

この敦煌の学術調査をはじめ、その後の相次ぐ海外の芸術大学との交流提携、ごく最近ではアフリカニスタンの戦後復興支援に至るまで、この二〇年間に本学の活動は国際化が大きく進められてきた。国際貢献を目指したその国際化を一貫してリードしてきたのが、現学長平山郁夫の強いリーダーシップだった。いまや交流提携大学も世界中の大学二〇校近くになっている。

一九八〇年代なかばから、円がドル二四〇円から一〇〇円ちょっとにまで強くなったことで、日本から海外への旅行や留学は、ずいぶん楽になった。日本への留学には、逆にハードルになったが、それでも本学への留学生は増え続けている。オアシスに東西の人々が行き交った敦煌のように、世界中の人々が集う日も遠くないかもしれない。

（さとう・べつしん/美術学部芸術学科助教授）

# タイムカプセルに乗っ



民族楽器「チカーラー」

「シルクロード・コンサート」のリハーサルの合間に



エスキモーを取材したおりの小泉文夫



# 1985

一九八五年、故小泉文夫教授（一九一七—一九八三）のご遺族から、傑出した民族音楽学者であった故人の膨大な量の楽器コレクションだけでなく、録音テープなどの研究資料が本学に一括して寄贈された。これらを保管整理して、将来の民族音楽学、楽器学の研究にあてるべく設立されたのが、「小泉文夫記念資料室」である。二年後の一九八七年、東京芸術大学創立百周年記念の年にはこの資料室の展示会が行われ、同時に「所蔵楽器目録」が作製された。彼は享年五六歳で病魔に倒れた。逝去されてもう二十一年になる。

世界各地の楽器コレクションの多様さは目録を見ても驚くが、蒐集のありさまは「わが家変じて楽器の『倉庫』とエッセイにあるほどである。

東京芸術大学音楽学部1985年

## 民族音楽学・ 楽器学の「宝庫」

小泉文夫記念資料室の開設

瀧井敬子

音楽学（ドイツロマン派、および日本洋楽草創期の研究）著書に『漱石が聴いたベートーヴェン 音楽に魅せられた文豪たち』。主要論文に「東西音楽の接点 音楽におけるジャポニズムの一面」がある。

いま資料室に収められている品々を、目録を手にながら眺めて廻るといつかは、得難い経験になるだろう。しかしこれらコレクションは、彼の著作に接すると、俄然多くのことを語り始める。たとえばサーランギ、ルバーフ、チカーラーについては「インドのサーランギ」（『民族音楽紀行』所収）というエッセイが絶好の資料である。三九本の弦で「異様な音」を出すサーランギなる弦楽器は、彼がいかにして出合っただけでその楽器の演奏方法を習ったか。またその系統的に近い楽器のチカーラーを地元の楽器屋からどういつ経緯で手にされたか。テンポのいい文章でそれら楽器の話を読むと、楽器はとも具本性を帯びてくる。あるいは別なエッセイ「執念のサントワール」でもいい。ユーモラスな話じぶりのなかで、歴史の重みのようなものを感じて肅然としてくる。現在の彼の著作選集は五巻も出ている。

小泉文夫は戦争中も一高の学生として、比較的のきな学生生活を送っていたようである。彼にとっては個人の転換期と時代の転換期とが重なったので、振幅の広い生き方になったのだらう。敗戦によって軍国主義が崩壊すると、ほかの青年たちと同じようにひどい虚無感に襲われたが、やがてヴァイオリンをかかえて進駐軍むけのタンゴバンドに加わったり、警察庁の通訳をして生活は確保しながら、民族音楽研究という生涯の仕事に向かい始めた。大学卒業後、一九五六年から二年間インドの音楽大学に留学し、これが小泉文夫にとって決定的な経験になった。『なつかしいインド、大嫌いなインド』というエッセイには彼の愛憎半ばする気持ちがよく出ている。以後、南アジアの首狩り族、イヌイット、エジプト奥地をはじめ、五十余カ国を経めぐったのは、彼のトレードマークにすらなった。

来し方を振り返った晩年、このように民族音楽研究に邁進していた日々ですら、彼は「何時でも服飾デザイナーや小説家に転身する可能性を考えていた」と回想しているから面白い。この民族音楽学のパイオニアには教師臭いところがなく、軽快なスマートさが印象に残っている。

（たきい・けいこノ演藝芸術センター助手）